

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代,あるいは諦念の人々』初稿(1821年): 翻訳の試みと覚書(6)
Sub Title	J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (6)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.63 (2023. ) ,p.31- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20230331-0031">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20230331-0031</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ  
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、  
あるいは諦念の人々』 初稿（1821年）  
—— 翻訳の試みと覚書（6） ——

山本賀代

試訳<sup>1)</sup>

第12章<sup>2)</sup>

ヴィルヘルムは謎かけに少し戸惑ったものの、やがて静かな誘惑を感じると、例の指定された進路を見つけ、ほのめかされた指示にしたがいたい

1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、本書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 128–145。脚注には主として2稿との異同（明確な変更箇所はアンダーラインで示す）を記した。ただし引用符の有無、コンマ・コロン等の記号の変動や正書法の修正・変更、さらに内容に影響のない細かい表現上の変更については省略した。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。

2) 2稿の第2巻第7章に対応。

という衝動に駆られた。想像力や行動力を刺激されると、それをなし遂げ  
味わいたいと私たちは強く望むものなのである。

5つのくじ番号が書かれたロト券を手渡ししながら子どもが小遣いをねだ  
るとき、その子を追いかえすことは容易ではない。不意に期待が高まって、  
いつもの流儀に反してこのような数字に手を出すかどうかはそのときどき  
であるが、とりわけ抽選日直前の場合には、そのようなことになりやすい  
ものである。

遍歴者は大きめの地図で小さい紙片を検証した。針がまさにミニオンが  
生まれ暮らした故郷を指したとき、彼は訝り、驚き、すっかり狼狽した。  
そのときの彼の気持ちを表示するものは見当たらない。しかし『修業時  
代』の結末をありありと思い浮かべることができる人なら、自身の頭や心  
にも同じようなことが呼びおこされることだろう。<sup>3)</sup>

この旅程について書かれたものを、私たちは希望するほどには見いだす  
ことができない。その最大の理由は、ヴィルヘルムが一人の若くて元気な  
旅の道づれに出会ったからであろう。この青年を通じて、あの聖地巡礼で  
過ごした敬虔なひとときの生き生きとした鮮烈な思い出は、ヴィルヘルム  
とその仲間たちのために保存されることができたのである。彼はたまたま  
一人の画家と一緒にあった。広い世界にはたくさんの画家がいるし、小説  
や演劇のなかでも画家が歩きまわり出没することはよくあることだが、こ  
のたびの画家は優れた芸術家として、ちょうど姿を現したのであった。<sup>4)</sup>  
二人はすぐに意気投合し、互いの好みや意図そしてこれからの計画につい

---

3) 2稿ではヘルジーリエが謎かけをするエピソードが削除されているため、  
両稿で内容が異なっている。2稿の導入部では、ヴィルヘルムは外科医を  
めざして専門教育に入るという「新しい人生行路」(FA 10, S. 496)に踏み  
だす前に、節目としてミニオンの故郷を訪れようとしているのであり、  
「50歳の男」の女性たちへの好奇心を示す記述はない。

4) まだ表現に若干の相違はあるが、内容的には重なっていく (Ebd., S.  
496f.)。以降はこのエピソードの終わりまで2つの稿のあいだに異同はな  
い。

てうちあげた。風景を水彩画で描く際に、気の利いた、巧妙に描かれ仕上げられた添景で飾ることを得意とするこの卓越した芸術家は、ミニョンの運命、形姿そしてその人となり心から夢中になっていることがわかった。これまでも彼はすでに何度もミニョンを描いてきたのであるが、彼女が生きた環境をありのままに写しとるために旅立ってきたのである。あのかわいい子どもの幸福だった頃の境遇や不幸だった時期をこの地で描き、優しい心をもつすべての人々のなかに生きつづける彼女の姿を、視覚的にも呼びおこそうというのである。

二人の友はまもなく大きな湖に到着した。ヴィルヘルムは指示された場所を少しずつ探したがそうとした。田舎の豪華な屋敷、広大な修道院、渡し場や入江、岬や船着場を探しもとめ、たくましく善良な漁師たちの住処、湖岸沿いに明るく建ちならぶ小さな町々、そして隣接する丘陵にそびえる小さな城を訪ねることも忘れなかった。芸術家はこうしたすべてをとらえ、その都度かもし出される歴史的な雰囲気を光と色彩によってわがものとすることができたので、ヴィルヘルムは日々、一刻一刻を深い感動に包まれながら過ごした。

ヴィルヘルムの詳細な説明が友人の抜きんできた想像力を刺激し、一般的なイメージをより限定された個人像に凝縮することができたので、何枚かの画用紙の前景に、ミニョンは生きていた頃の姿そのままに描かれた。

こうしてあの男の子のような少女は、さまざまなポーズをとって、多くの意味あいをこめて描かれることになった。堂々とした別荘の入り口に立つ高い円柱の下にたたずみ、憂い顔で玄関の大理石像を眺めていたり、水をびちゃびちゃとさせ繋がれた小舟の上で揺られていたり、マストによじ登る勇敢な水夫のような姿もあった。

しかしとりわけ注目されたのは、ヴィルヘルムに出会う以前に芸術家はこちらに向かう旅の途上で描いたもので、さまざまな特徴が描きこまれていた。荒々しい山の中腹の切りたつ岩にとり囲まれ、滝のしぶきを浴び、男の子のような少女は描写しがたい粗悪な集団のなかで優美な輝きを放つ

ていた。最古の岩層がむきだしになったぞっとするような急斜面の峡谷に、これほど優美で意味深い添景が与えられたことはないであろう。色とりどりのジプシー風の仲間たちは粗野でありながら幻想的、風変わりかつ卑俗であった。恐怖を感じるには軽薄すぎ、信頼を感じるには奇妙すぎた。気の荒い荷馬が丸太道や刻まれた石段を下りながら雑多な荷物を運んでいく。荷のまわりにはひどい騒音を奏でる楽器一式が音をたててぶら下がり、ときおり大きな音で人々の耳を煩わせている。こうしたものすべてに囲まれ、愛らしい子は逆らうことなくもの思いに沈み、いやいやながらも反抗もせず、引きずられるでもなく連れられていく。このように完成された不思議な絵を喜ばない人がいただろうか？ これら岩塊からなる恐ろしい峡谷の特徴は力強く描きだされていた。すべてを分断するような暗黒の山峡が次々と重なりあい、もし一本の危険な橋が外界につながる可能性をほのめかしていなかったなら、出口はどこにもないように思われただろう。さらに芸術家は詩的真實に対する鋭い感覚によってひとつの洞窟を際立たせていた。これは自然が創りだした巨大な水晶のようにも、おとぎ話の恐ろしい竜のやからの住処のようにも見えた。

侯爵の屋敷を訪れる際、二人の友は畏れかしこまらずにはいられなかった。老人は旅行からまだ戻っていなかったが、二人はこの地区で歓迎され親切に扱われた。聖俗のいずれの役所ともうまく折りあう術を心得ていたからである。

しかしながら当主の留守をヴィルヘルムはありがたく思った。もちろんあの高貴な紳士にぜひとも再会し、心からのあいさつを交わしたかったのではあるが、彼の感謝の気持ちからくる気前のよさを恐れ、すでに十分な褒美を受けているにもかかわらず、あの誠実で愛情に満ちた行為に対して何か報酬のようなものを押しつけられはしないかと心配していたのである。

こうして二人の友は優雅な小舟で湖を岸から岸へと縦横無尽に漕ぎまわった。一年でもっとも美しい季節だった。彼らは昇る朝日も沈む夕日も、そして陽光が天空から湖そして大地へと惜しげもなく降りそそぎ幾重にも

変化する微妙な陰影も見逃すことはなかった。陽の光の壮麗さはその反射のなかで初めて完全な姿を現すものなのである。

自然に芽吹いたさまざまな植物が人間によって育て広げられて繁茂し、彼らをいたるところでとりまいていた。最初に現れた栗の木林がすでに二人を歓迎してくれていた。しかし今や糸杉の下で憩い、月桂樹が高くそびえ、柘榴の実が赤く色づき、オレンジやレモンの花が咲きみだれ、同時に暗き葉陰から果実が輝くばかりにのぞいているのを眺めたとき、彼らは悲しく微笑まずにはいられなかった。

しかしこの元気な仲間を通じてヴィルヘルムには新たな喜びが生まれてきた。われわれの古くからの友は画家のような目を自然から与えられてはいなかった。彼はこれまで、ただ人間の姿に現れた目に見える美しさしか感じるができなかった。しかし今、自分と同じ気持ちでありながらまったく別の喜びや活動のための教育を受けた友人によって、自分にもまわりの世界が開かれたことに彼は突然に気がついたのである。

会話のなかでこの地方の変化に富んだ魅力を教えられ、それ以上に精神を集中して写しとられたスケッチを通じて彼の目は開かれ、かつて頑なに抱いていたあらゆる疑念から解放された。昔から彼にはイタリア地方を写生した作品はうさんくさいものだった。空は青すぎると思われたし、紫の色味を帯びた魅力的な遠景は大好きだったが、本当らしくなかった。多彩で瑞々しい緑色は鮮やかすぎた。しかし今、ヴィルヘルムは新しい友人と心からひとつに溶けあい、感受性の強い彼は友の目で世界を見ることを学んだ。自然がその美しさの公然の秘密を開示するとき、芸術はそのもっとも相応しい解釈者である。この芸術に対する抑えがたい憧れが溢れださずにはいなかったのである。

ところがまったく思いがけないことに、この画家である友人はもうひとつ別の方面からもヴィルヘルムを喜ばせた。画家はときおり朗らかに歌いだすことがあり、舟で遠くまで漕ぎだし波間をただよう静かなひとときに興を添え、心を浮きたたせてくれた。そして今、たくさんある屋敷のひとつ

つで彼はとても独特な弦楽器を見つけたのである。それは小型のリュートで、力強く豊かな響きをたて、気軽に持ち運ぶことができるものだった。彼はその楽器をすぐに調律すると、正しく丁寧に扱い、居あわせた人々を気持ちよく楽しませることができた。この歌手は新しいオルフェウスのように、いつもは厳格でそっけない管理人の態度を和らげ、しばらくの間、ぜひとも楽器を貸してもらえないかと頼みこんだ。もちろん出発前には必ず返却すること、途中の日曜日や祝日には屋敷を訪れ、この家の人々を喜ばせることが条件だった。

こうして湖上も岸辺もまったく別世界のように活気づいた。ボートや小舟は彼らに近づこうと必死になり、貨物船や市場の船ですら彼らの近くでしばらく動きを止めた。湖岸では人々が列をなして追いかけてきて、彼らが上陸すると、喜んだ群衆はすぐに二人をとり囲んだ。別れ際には誰もが満足し、憧れのまなざしで彼らを祝福した。

さて最後に第三者が現れてこの友人たちを観察したならば、二人の使命は実はすでに終わっていることに気がついただろう。つまりミニオンゆかりの地方や場所はすでにすべてスケッチされ、光、影そして彩色をほどこされ、暑い昼間に忠実に完成されていたのである。これらをなし遂げるために、彼らは独特なやり方で場所から場所に移動した。というのもヴィルヘルムの誓約がしばしば邪魔になったからである。しかし彼らはときには例外としてそれをやり過ごすことができた。約束は陸地でのみ有効で、湖上では適用されないというのが彼らの言い分である。

ヴィルヘルム自身も、自分たちの本来の目的はすでに達成されたことを感じてはいたが、自由な気持ちでこの地方を離れるためには、ヒラーリエと美しい未亡人に会うという願いもかなえておかなければならないことを否定できなかった<sup>5)</sup>。物語をうちあげられた友人も少なからず好奇心を抱

---

5) ヒラーリエと美しい未亡人がこの地に来ることは、初稿では前章の「ヒラーリエの追伸」のなかでヴィルヘルムに明かされているが、2稿ではこの設定が変更されているため、本来ならば修正が必要な箇所である。同様

き、彼のスケッチの一枚のちょうどよい場所に空きがあることに気づき喜んだ。その場所を愛すべき人物たちの姿で芸術的に飾りたてようと考えたのである。

今、彼らはあちらこちらと小舟を進めて、外からこの楽園に入ってくる場合に通過するはずの地点を見守っていた。船頭たちにはここで友人と会えるかもしれないという期待をすでに伝えてあった。ほどなくして二人は、飾りつけされた立派な船が湖面をすべるように近づいてくるのを見つけた。彼らは必死に追いかけて、夢中になって船に乗りこもうとした。二人の女性たちは戸惑っていたが、ヴィルヘルムが小さなメモを見せ、自分たちが描いた矢印に間違いがないことを確認すると、すぐに落ち着きを取りもどした。男たちはただちに信用を得て婦人たちの船に招待され、急いで乗りこんだ。

この四人が船上のもっとも美しい場所に集まり、向きあって座り、至福の世界に囲まれ穏やかな風に吹かれ、輝く波の上を揺れている姿をぜひ思い浮かべていただきたい。しばらく前に物語られた二人の女たち、そして数週間前より旅の生活を共に送ってきた二人の男たちのことを考えていただきたい。少し観察すれば、彼らが全員、非常に快適ではあるが非常に危険な状況におかれていることがわかるだろう。

望む望まざるにかかわらず、すでに諦念の人に数えられる三人にとってはもっとも深刻な事態を心配する必要はないが、四人目の男はこれからまもなくしてあの結社に迎え入れられることになるだろう。

何度か湖上を行き来して、岸や島のもっとも興味ぶかい場所を指さしながらの案内も終わると、男たちは婦人たちを今夜の宿と定めていた場所に送りどけた。そこでは、この旅行のために雇われた熟練の案内人が何もかも望ましく快適に準備していた。ここでついに、礼儀を守るために適切な先生役を務めるヴィルヘルムの誓約が不都合なものとなった。つまりこの場所で男たちは少し前に三日間を過ごし、まわりの見るべき場所をすべて見学してしまっていたのである。この誓約に縛られていない芸術家は、

の不整合は複数残っている。



陸地まで婦人たちに同伴させてほしいと願ったが、女たちがそれを断ったので、船着場から少し離れたところで彼らは別れた。

歌手が自分の舟に飛びうつると、小舟はすぐに岸辺を離れた。そのとき彼はリュートをつかみ、ヴェネツィアの舟人が陸から海へ、海から陸へと響かせるあの独特の嘆きの歌を美しく奏ではじめた。十分に訓練されているので、彼はこの度も極めて繊細に表情豊かに歌うことができた。彼は離れていく距離に合わせて音量を上げたので、岸辺で聴いている人々には離れていく人がいつまでも同じ距離にいるように思われた。最後に彼はリュートの演奏をやめ自分の声だけにまかせたが、婦人たちが建物に入らず、いつまでも岸辺にとどまろうとしているのを見て満足した。彼は心から感動していたため、ついに夜になり岸から遠く離れ、まわりのものが何も見えなくなってしまってもなお歌い続けていた。とうとう彼よりは落ち着いた友人が、たとえ暗闇のなかで音が美しく響くとはいえ、舟は歌声が岸辺に響く圏内をずっと前に離れてしまったと彼に注意した。

四人は翌日、約束どおりにもう一度、広々とした湖上で落ちあった。飛ぶように通り過ぎながら、彼らは独特な地形の一連の美しい景観に親しんだ。湖岸線が一行に見渡せるところもあれば、入り組んでいて見渡しがたい場所もあるが、いずれも景色が水面に映って二重になり、岸の近くを航行する者にもっとも多彩な楽しみが与えられた。そのとき芸術家が紙に写しとったスケッチは、今日の舟遊びで自分では気づけなかったものを推測させ、暗示するのであった。こうしたすべてに対して、物静かなヒラーリエがこだわりのない優れた感覚をもっているように思われた。

そして真昼ごろにまたしても素敵なことが起こった。婦人たちだけが上陸し、男たちの乗った小舟は船着場の前で行ったり来たりしていた。そこで歌い手はこのような出会いに相応しい演奏を試みようとした。単に心をこめて元気に歌うヨーデル唱法による一般的な憧れの響きだけではなく、朗らかで優美な切実さによっても何か素晴らしい効果が期待できるように思われた。『修業時代』に登場する愛すべき人々から教えてもらった歌の

あれこれが思いだされ、弦の上そして唇の上に幾度となく現れかけた。しかし彼は自分自身にも不可欠だった優しい思いやりからそれを自制し、むしろ別のイメージや感情にあちらこちらと身をまかせた。それが彼の演奏によい効果をもたらし、ますます人の心をくすぐるように響いた。二人の友はこのように船着場に停滞しながら、もし気の利く女友だちが美味しい軽食を届けてくれなかったら、飲食のことなど忘れていただろう。食事と一緒に届いた選りぬきのワインを飲むと、それは格別に美味しかった。

愛情の芽生えを邪魔しようとどんなに分けへだて条件をつけても、それは愛情を和らげる代わりにかえって敏感にさせるものである。今の場合も、しばらく離れていたことで両方の側に同じような憧れの気持ちがひき起こされたと推測することができる。思ったとおりだ！ 婦人たちがぴかぴかの派手なゴンドラに乗って、まもなくこちらにやって来るのが見えた。

しかしゴンドラという言葉を物悲しいヴェネツィア風の意味にとらないでいただきたい。ここでは陽気で快適な気持ちのよい舟のことを指すのであって、われわれの小さな仲間が二倍いたとしても、空間的余裕は十分にあっただろう。

このようになりに風変わりなやり方で出会っては別れ、離れては集まりながら、数日が過ぎていった。この上なく愉快的集いを楽しみながらも、感動に震える魂の前には、常に離ればなれとなり恋しくてたまらない気持ちがただよっていた。新しい友人たちを目の前にしていると、古い友人たちのことが思い出された。そして新しい友人たちの不在に淋しくなると、早くも、この人たちもまた思い出になる定めは避けられないのだと認めざるをえないのだった。美しい未亡人のように試練を経て落ち着いた心の持ち主だけが、このような時間に対して気丈に平常心を保つことができた。

新たな、ありのままの印象を受けいられるようになるには、ヒラーリエの心の傷はあまりに深かった。それでも壮大な土地の優美さに囲まれて穏やかな気持ちになり、感情豊かな友人たちの親切が心に響くと、何か奇妙なものが精神と心に襲いかかるものである。過ぎ去りしもの、今は存在

しないものは夢のように呼びもどされ、一方、目の前にあるものは、ただの幻であるかのように、亡霊のように遠ざけられてしまう。こうして次々とあちらこちらと揺られ、魅了され、はねつけられ、近づき、遠ざかりながら、波がうねり泡立つように、彼らは変化に富んだ日々を過ごした。

このような人間関係について詳細な判断をくだしたりはしないが、世故にたけ経験豊かな旅行案内人は、彼の女客たちの落ち着いたふるまいのなかに以前とは少し異なる調子が現れてきたのを感じた。こうした状況のむら気がいよいよ露呈したとき、彼は今回も彼女たちを非常に喜ばせることができた。つまり、婦人たちの食事が準備されている場所に再び彼女たちが連れられて行こうとしたとき、飾りたてた別の舟が現れ、彼らの舟に横づけされた。その舟の食卓にはご馳走が並べられ、祝宴のような晴れやかさで人々を誘ったのである。数時間を一緒に過ごすことができたのち、夜になってようやく彼らはいつもどおりに別れた。

幸運なことに自然のままの場所を偏愛するあまり、男たちはこれまでの周遊の際、島々のなかでもっとも作為的に飾られた島に足を踏み入れることを怠ってきた。今でもまわりの素晴らしい光景を見つくすまでは、最善の状態に保たれているとは言えない人工的な場所に女友だちを案内するつもりはなかった。しかし最後に別の光が差しこんできたのである！案内人に秘密をうちあけると、この男はこの船旅をすぐに実行に移した。彼らには最高に幸せな旅だと思われた。というのも、これまで楽しみはくり返し中断されてきたが、今や彼らは閉ざされた世界に身を寄せ、完全に天国にいるような三日間を過ごすことが期待できたのである。

ここでこの旅行案内人をとりわけ褒めたたえなければならない。彼は臨機応変に対応できる案内人の一人であった。彼らは何人もの旅行客に同伴しては同じルートを度々往復している。何を避け何を利用すべきか、快適なところも不便なところも知りつくし、自分の利益も考慮しつつ、雇い主が個人で国中をまわるよりもずっと安上がりになり、ずっと満足のいくように道案内することができるのである。

同時に婦人たちの女給仕の働きぶりが目に見えて頭角を現したので、美しい未亡人は、簡素なもてなしでがまんしていただけるなら、二人の男友だちを客人として招待したいと提案することができた。ここでもすべては首尾よく運んだ。というのも抜け目なく雇い主の代理を務める旅行案内人は、この機会にも以前と同様に婦人たちの紹介状を巧みに利用して、所有者が不在であるにもかかわらず、城と庭園そして台所まで自由に使えるよう開放してもらった。それどころか地下貯蔵庫を使用する見込みすら残っていた。このように万事が整い、彼らは最初の瞬間からまるで自宅にいるかのように、生まれながらのこの楽園の主人であるかのように感じずにはいられなかった。

旅人たち全員のすべての荷物がすぐに島に運ばれた。これは彼らには大変都合良かった。一番の利点は才能ある画家の全作品が初めてすべてそろったことであり、彼がたどってきた道のりを美しい婦人たちに順を追って説明する機会が与えられたのであった。彼らはこの活動に夢中になった。愛好家と芸術家が互いを褒めあうのとは違い、ここでは一人の傑出した男性に対して心のもった分別のある賛辞が贈られたのであった。しかし実際にはお見せすることができないものを陳腐な言葉を弄して信じやすい読者諸氏に押しつけようとしているのではないか、そのような懸念を受けないためにも、ここで一人の識者の批評を挿入することにしよう。ここで話題にしている作品だけでなく、これらによく似た作品についても、この人物はその後もずっと支持し続けたのである。

「彼は静寂をたたえた湖の情景の朗らかな安らかさを描写することに成功している。湖岸に並ぶ快適な住居が澄みきった湖面に映り、まるで水浴しているようである。岸は緑の茂る丘に囲まれ、その背後には森をなす山々と凍てつく氷河がそそり立っている。これらの風景の色調には朗らかで陽気な晴れやかさがある。遠景には降りそそぐように柔らかなもやがかり、霞の色はますます深まりあたりを満たしつつ、川の流れる低い谷底から立ちのぼり、流れのうねりをほのめかしている。それに劣らず巨匠の

技として褒められるべきなのは、山地により近い谷間からの光景である。そこでは木々の生い茂った山腹が低地まで続き、岩山のふもとを清流が転がるように勢いよく流れていくのである。

前景で濃い陰をつくる木々の描写では、全体の造形においても個々の枝ぶりや葉の諸部分においても、彼は多様な種類のそれぞれの個性を描きわけ十分に暗示することに成功している。瑞々しい緑の多彩な様子も負けてはいない。そこでは微風の息吹がやさしく感じられ、それゆえに光がちらちらと揺れ動くように見えるのである。

中景においては色鮮やかな緑色が少しずつ減退し、さらに遠くの山の頂きで空の青色に溶けこみ淡いすみれ色となる。しかしこの画家が何よりも成功しているのは、より高くそびえるアルプス地帯の描写であり、その特徴は単純なる偉大さと静けさである。山腹に広がる牧草地はとりわけ瑞々しい緑でおおわれ、芝生の絨毯から黒いもみの木が点々とそびえ、高い岩壁からはいく筋もの小川がしぶきを上げて流れ落ちている。牧草地に草を食む牛を添える場合も、あるいは岩のまわりを蛇行する狭い山道に荷物を運ぶ馬や騾馬を添える場合も、彼が描くものはすべて同じように見事に才気に溢れている。適切な場所に常にやりすぎることなく描かれ、動物たちはこれらの絵を飾り活気づけている。静かな安らぎを乱したり、わずかでも減じさせることすらない。仕上げの大胆さは名人芸である。軽やかに、確実なわずかの筆さばきでそれは完成している。のちに彼はイギリス製の発色のよい耐久性のある絵の具を紙に用いたので、これらの絵画はとりわけ華やかな色調を帯び、朗らかで、しかも力強く満ちたりている。

あたり一面がもの言わぬ石だらけで、谷底には肝が縮むような橋がかかり、奔流がたけり狂う岩山の深い峡谷をスケッチした彼の何枚かの絵は、先ほどの絵のように人々に受けいられるものではないが、その真実が心に迫り、私たちは全体の大きな効果に感嘆する。それは重要なわずかな線と無駄のない固有色の塊によって生みだされている。

同じように彼は山岳地方の特徴を描きだすこともできる。もはや樹木も

灌木も育たず、尖った岩と雪をかぶった山頂のあいだで、陽のあたる平地だけが柔らかな芝草におおわれている。そのような場所を彼は非常に美しく彩色し、緑の香りが立ちこめ人を誘うようである。しかも彼がここに草を食む家畜たちを描きこまなかったのは賢明である。というのもこのような地帯はカモシカに餌を提供したり、危険をおかして干草を刈る人々に収穫をもたらすだけなのである。」

今使用した「干草を刈る人々」という言葉について少しだけ解説を加えても、読者諸氏にこのような荒涼地帯をできるだけ間近に感じてもらうという意図から外れることはないだろう。この言葉は山岳地方の比較的貧しい住民たちに使われる。彼らは大胆にも家畜がまったく近寄れないような草地で干草を作る。そのために彼らは靴裏に登山用の鉤を付け、非常に険しく危険な崖をよじ登ったり、必要ならば、高い岩壁から縄をつたって上述の草地に飛びおりたりするのである。刈りとられた草は乾かされて干草となる。彼らはそれを山からずっと下の谷底へと投げ落とし、下で再び集められ、家畜を所有する人々のもとで売買される。品質がよいので、喜んで取り引きされるのである。

これらの絵は誰をも喜ばせ惹きつけるに違いないが、とりわけヒラーリエが注意深く観察した。彼女がこの分野に疎くないことは彼女の意見からよくわかった。とりわけ画家がこの事実に気づかないはずはなかった。他の誰からよりも、全員のなかでもっとも優美なこの女性に認められていることに彼は喜びを感じた。そこでまもなく歳上の女友だちも黙っていらなくなり、次のようにヒラーリエを非難した。「いつものように今回も、あなたはご自分の器用さを目立たせないように躊躇していらっしゃるのね。でも今、大切なのは褒められたり批判されたりすることではなく、学ぶことではないかしら。こんな素晴らしい機会はおそらく二度とめぐってはこないでしょう。」

こうしてヒラーリエが自分のスケッチブックを披露するように迫られてみると、物静かでもとても愛らしいこの人物にどれほどの才能が隠されていたのかが初めて明らかになった。生まれつきの画才は勤勉な訓練を受けていた。彼女にはものを正確に把握する目と、装飾品を制作する場合に女性たちが高度な技術を発揮するような、手先の器用さが備わっていた。もちろん不確かな線も見うけられ、それゆえに対象物の特徴を万全に表現しているとは言えなかったが、みんなが感嘆するほど几帳面に仕上げられていた。しかし全体がもっとも有利な形でとらえられ、美的に適切な場所に配置されているわけではない。対象物に完全に忠実でなければ、それを損なってしまうと彼女は恐れているようであった。そのために不安になり、細部にとらわれてしまっているのである。

しかし今やヒラーリエは画家の偉大で奔放な才能と遠慮のない筆使いに刺激を受け、彼女のなかで変わらずにまどろんでいた感覚や趣味を目覚めさせたのである。画家は心をこめて徹底的にいくつかの原則をくり返し伝えた。彼女は勇気を出して、ただ真面目に言われるままにその原則にしたがいさえすればよいということがわかってきた。すると線もしっかりとして、彼女は諸部分よりも全体を大切にするようになった。こうして非常に美しい能力が思いがけず開花し、完成を見たのである。夕暮れにはまだ顧みることもしず、わきを通り過ぎた薔薇のつぼみが、朝になり日の出とともに私たちの目の前に突然に現れたようなものである。その華麗な姿が光に向かって生命をうち震わせているのをこの目で見る思いだった。

このような美的な成長のあとには道徳的な余韻も生まれないままではなかった。というのも決定的な教えを授けてくれる人に心からの感謝の念を抱くと、その純粋な心には魔法のような印象がもたらされるものなのである。今回、ヒラーリエの魂にじわじわとこみあげてきたのは、生まれて初めてのわくわくするような感情であった。素晴らしい世界を何日にもわたって初めて目の当たりにし、今、突然に与えられた完璧な表現力を感じるとは何という喜びだろう！ 言葉では伝えられないものに、筆の運びや色



彩によってより迫ることができるなんて！ 新しい青春が訪れたように感じて彼女は驚き、このような幸せを授けてくれた男への特別な愛情を抑えることができなかつた。

こうして彼らは並んで座っていた。役立つ技法を伝える者と教えを受け実行する者のうち、一体どちらがより性急であったかを判別することはできなかつたであろう。弟子と師匠のあいだで生じることの珍しい、もっとも幸福な競争が始まった。ときどき画家がヒラーリエの絵に決定的な一筆をつけ加えようとするのがわかると、彼女は優しくそれを拒み、画家が望んでいたこと、必要と思われたことを急いで自分で行ない、いつも彼を驚かすのであつた。

一方で、美しい未亡人はヴィルヘルムと一緒に糸杉や松の木の下を散策したり、テラス式庭園のぶどうやオレンジ棚のそばをそぞろ歩くうちに、新しい友人がそれとなくほめかした希望をかなえずにはいられなくなつた。奇妙な組みあわせが生じ、その結果、女たちはそれぞれ以前の関係を断ち切り、互いに心をひとつにして広い世界に送りだされてきたことを、彼女はついに彼にうちあけたのである。

どんなことも正確に記憶する能力をもつヴィルヘルムは、のちに穏やかな物語を書きとめた。彼が執筆しヘルジーリエを介してナターリエに送られたこの物語を、私はいつか読者諸氏にお伝えしようと考えている。<sup>6)</sup>

とうとう最後の夜がやって来た。時間が経ち昼から夜に移りかわつたことにも気づかないほど、煌々と輝く満月の夜だった。彼らは庭園にある一番高いテラスに集まり、奥の方は一部隠れているものの、横にずっと開けた湖をながめていた。穏やかな湖面は東からも西からも照らされ、光をは

6) この箇所は2稿でもそのまま残されているが、設定を変更した改作の過程での「純粋な削除のし忘れ」として、ヴァイマル版はこの部分を2稿から削除し、ハンブルク版などもこれになつた。最新の全集(FAおよびMA)は復活させている。Vgl., *Goethes Werke*. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar 1887-1919 [=WA], Bd. 28, S. 372 u. Bd. 29, S. 112.



ね返してきらきらと輝いていた。このような状況では何を話題にしたところで、行きつく先は何百回も語られてきたことに尽きる。力強い太陽と優しい月の光に支配されたこの空と海と大地の素晴らしさをくり返し語り、ひたすら感慨深く賞賛するのをやめることはできなかった。

あえて口に出さず、自ら認めようとしなかったが、深い苦痛が全員の胸のうちに広がっていった。それは程度の差こそあれ、一様に真実で心からこみあげてくる感情だった。別れの手感が全体に広がると、徐々に沈黙がちになり、彼らはほとんど不安な気持ちになった。

そこで画家は勇気をふるい起こして決心すると、歌手として楽器を手にとり力強く前奏を奏ではじめた。これまでの考えつくされた配慮はすっかり忘れてしまった。ミニョンの姿とこの愛らしい子が最初に歌った優しい詩句が彼の頭に浮かんだ。一線を越えて溢れだした情熱にまかせ、憧れに満ちた指先でよく響く弦をかき鳴らすと、彼は歌いはじめた。

あの国を知っていますか？ レモンの花咲き  
暗き葉陰に……

ヒラーリエは感動に震え、立ちあがると、顔をおおい離れていった。美しい未亡人は片手を歌手の方にふり拒絶の合図を送り、もう一方の手でヴィルヘルムの腕をつかんだ。すっかり混乱した若者はヒラーリエのあとを追った。比較的落ち着いていた未亡人は、ヴィルヘルムを引っぱり二人のあとに続いた。空高く昇った満月の光に照らされ、四人がそろってお互いに向きあい並んだとき、もはや全員の心に広がる感動はつつみ隠すことができなかった。婦人たちは相手の腕のなかに身を預け、男たちは互いの首に抱きついた。月がこの上なく高貴で清らかな涙の証人となった。少しずつ冷静さを取りもどすと、彼らはおし黙ったまま互いから身をもぎ離れた。奇妙な感情や願望に支配されたが、彼らにはすでに希望はなかった。画家はヴィルヘルムに引っぱられてゆき、清らかな空の下での厳しくも愛しい

夜のひとときに、今や自分は諦念者のあらゆる苦悩の最初の段階に入ったのだと感じた。このような苦悩を他の友人たちはすでに克服してきたわけだが、彼らにしても、今、再び試練を受けて苦しむ危機にさらされていた。

若者たちが眠りについたのは夜も更けてからであったが、早朝、早めに目を覚ますと、二人は勇気をふるいたたせ、自分たちは立派にこの楽園からの別離に耐えることができると信じ、どうすれば義務を破らずに、少なくとも気持ちのよい距離を保つことが可能だろうかとあれこれ計画を練った。

そういうわけで、男たちが自分たちの提案をもちかけようとしたとき、すでに婦人たちが夜明けとともに出発したという知らせを聞いて、彼らは愕然とした。それ以上のことは愛しい女性の筆跡による一通の手紙から知ることができた。しかしそこに書かれていたことについて、理性からなのか親切心からなのか、愛情なのか友情なのか、心尽しを認めてくれたのか、やや気恥ずかしくなるような愛情が混じっているのか、二人にはどれとも決めかねた。残念なことに末筆には無慈悲な要求が含まれていた。婦人たちのあとを追うことも探しまわることもしてはいけない、それどころか偶然に出会っても、誠実にお互いを避けあいたいというのである。

今や男たちにとって楽園は魔法にかかったようにただの荒地に変わってしまっていた。これほど美しい注目すべき環境に対して突然に不当で恩知らずな態度をとったことに男たちが気づいたならば、彼ら自身、微笑せずにはいられなかったであろう。どんな身勝手なヒポコンデリー患者でも、廃墟となった建物や放置された壁、風雨にさらされた塔、雑草の生い茂る小道、枯れた樹木、苔むし腐りかけた人工洞窟、その他の目につくものすべてに対して、これほど辛辣で妬ましげに文句を言い、ののしることはなかったであろう。しかしまもなく彼らも自然に落ち着きを取りもどしていった。画家は几帳面に自分の作品を荷造りし、二人は船に乗りこんだ。ヴィルヘルムは湖の上部地方まで画家に同伴し、画家はそこで以前の約束にしたがってナターリエのもとに向かった。おそらく彼女はそう簡単にはこ

の地を訪れることができない。そこで美しい風景画を見て、この地方にいるように感じてもらおうというのである。同時に彼は予期せぬ事件を告白し報告する権利も与えられ、これによって諦念の結社の仲間たちから心のこもった歓迎を受け、愛情たっぷりにもてなされた。こうして彼は、癒やされたとまではいかずとも、いくらかは慰められたのである<sup>7)</sup>。

[第12章終わり]

---

7) 2稿ではこのあとレナルドーからヴィルヘルムに宛てた手紙(2稿で追加されたヴィルヘルムがくるみ色の少女について知らせた手紙に対する返信)、続いて司祭からヴィルヘルムに宛てた手紙(2稿で追加されたヴィルヘルムが3日以上同じ場所にとどまることができないという条件免除を請う手紙に対する返信)、最後に小説の編集者による「中間の言葉」が置かれて章が終わる。

## 今回の試訳について

今回訳出したのは、初稿全18章の第12章で、2稿の第2巻第7章に対応している<sup>8)</sup>。両稿の章の導入部分は少し異なるが、主要部分である『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795-96年)に登場する薄幸の少女ミニヨンの故郷でのエピソードは、1821年1月頃に執筆された初稿がそのままの形で2稿にも採用されている。ヴィルヘルムは、イタリアのマジョーレ湖が舞台とされる<sup>9)</sup>ミニヨンの故郷を一人の若い画家と共に訪れ、この美しく感傷的な場所で「50歳の男」の登場人物である美しい未亡人とヒラーリエとともに楽しいひとときを過ごすことになる。初稿ではこのエピソードとともに章が終わるが、2稿では注7に記したとおり、その後にヴィルヘルムに宛てたレナルドーおよび司祭からの返信が追加され、さらに編集者の「中間の言葉」で章が終わる。

「50歳の男」の全体がすでに紹介されている2稿とは違い、初稿では、ヴィルヘルムはヘルジーリエの手紙に同封された「50歳の男」の前半部分だけを読んでおり(第11章後半)、二組の男女の関係がその後どのように展開したのかを知らないまま、第12章で物語の女性主人公たちと直接交流する。注6の下線部から明らかなように、初稿では「50歳の男」の後半部分は、まずヴィルヘルムが美しい未亡人から直接話を聞き、ナター

8) 2稿の第2巻第4章から第6章は初稿には存在しない。2稿の第2巻第4章と第5章は第3章から続く「50歳の男」の後半部で、連続する3つの章でノヴェレは完結する。第6章はヴィルヘルムの2通の手紙から成る短い章である。前者の手紙でヴィルヘルムはレナルドーに宛ててくるみ色の少女の発見を報告する。後者は司祭に宛てられたもので、ヴィルヘルムは外科医になることを決意し、三日以上同じ場所にとどまることができないという遍歴者の掟を免除してもらえよう請願する。

9) ゲーテ自身はこの湖を見たことはない。ヴァイマル絵画学校長でもあったゲオルク・メルヒオール・クラウスがイタリア旅行から持ち帰った水彩画を、ゲーテは執筆のためにヴァイマル図書館から借りだしている。Vgl. FA 10, S. 1127f.

リエのために書きとめ、ヘルジーリエを通じて彼女に送られる。その原稿をもとに、のちに小説の編集者が読者に向けて紹介するという『遍歴時代』冒頭を構成する「聖ヨゼフ二世」の物語と同様のアルヒーフ・スタイルが予定されていた。しかしこの設定は改作の過程で変更される。2稿の「50歳の男」の導入部（第2巻第3章冒頭）で語り手は、最初はいくつかの部分に分けて紹介するつもりだったが、連続的に物語ることに変更したと小説の成立事情そのままに告白することになる<sup>10)</sup>。この導入部の草稿は1828年12月22日のヴァイマル劇場のチラシおよび24日の手紙の下書きの裏面に書かれており<sup>11)</sup>、ゲータはぎりぎりまでこのノヴェレを分割挿入するつもりだったことが推察される。

2稿の第2巻第7章の終わりに置かれた「中間の言葉」の不採用原稿にも、計画変更の痕跡を見いだすことができる。

[……] しかしここで私たちは中休みを入れることを余儀なくされます。というのも人生でも小説でも、時間とは重要な権利を行使するものなのです。われわれはここで登場人物たちに、彼らにもわれわれにも役立つ数年を与えましょう。年配の者たちは正気に戻るでしょうし、中年の者たちはより力強く、理性的に歩きだすでしょう。若者が、私たちの愚かな行為や、できれば私たちのよい行為に関与できるまでに成長した姿を、私たちは見いだすでしょう。[……]<sup>12)</sup>

ミニヨンの故郷訪問と2度目の教育州訪問とのあいだに数年の年月が経過することを読者に伝える点は、最終的に採用された「中間の言葉」と同様であるが、不採用原稿には、中休みの意義としてこの数年間での登場人物たちの成長についての言及がある。より力強く、理性的に歩みだす中年

10) Ebd., S. 433.

11) WA 29, S. XIV.

12) WA 29, S. 114.

とは、外科医になるための専門教育を終えるヴィルヘルムや遍歴組合の重要な任務を果たすレナルドーを指しているのだろう。成長した若者とは、ヘルジーリエに愛を告白する青年フェーリクスに違いない。では正気に戻る年配者たちとは誰のことか——「50歳の男」を前半と後半に分けて挿入する計画がまだ生きていたとすれば、若い女性との結婚に心が揺れた50歳の男が正気を取りもどし、美しい未亡人が改心するノヴェレ後半部を暗示しているとみなすことは十分可能だろう。「50歳の男」が連続した物語にまとめられたとき、この「中間の言葉」は最終版に差し替えられたが、ノヴェレ内部の注5や注6のくだりは不整合なまま残された。ゲーテの不注意という指摘はもっともではあるが、架空の編集者によるアルヒーフ小説にとっては、むしろ編集の痕跡のリアリティとして許容されうる要素ということもできるだろう。